

明治十九年六月廿九日御届

七月十四日出版

小兒養育法一班

非賣品

東京神田橋本町二丁目三番地

小兒科醫 石澤武吉述

凡そ小兒の諸病は不言の疾として自ら其苦痛を訴ふる事を得ざれば甚しき重病にても其危篤に至る迄は父母母と雖も之を知らず思ひ及ぶるの死をなすこと多し最も憫むべく最も悲しむべき事ならざるや若し或は幸に良醫士に邂逅て一命を救ふ事あるも小兒の中度々大病に罹るときは身體衰弱して成長の後精神必らず活潑ならず生涯碌々として樂しむるの月日を送るに至る是に不幸の極と謂へば故に世の父母たる者ハ小兒の未だ出生せざる前より小兒養育法を心得置き成るべく小兒に病患なきやうに注意して養育すべし若し少くても平常に異なることあらば速に良醫の診察を請て大事に至らざるやうにすべし蓋し小兒の疾病を治療するハ唯薬の量を減ざるのみにて決して宜しきものに非ず其病機も其技術も遂に大人と差異あり如何となれば小兒出生して凡そ一年間は半ハ母の體外に在り半ハは母の體内に在るが如きを以て毫の障碍にも病患に罹り易く且つ病に罹る時は衰弱すること危険に陥ること俄にして回復に至る事も亦輕捷なり故に巧に能く大人の病を治療する醫と雖ども小兒の病に至ては甚た拙なき者あり是を以て小兒一科の治術ハ頗る經驗研究に富む良醫士に非ざらんば争か能く啞聾否不言の小兒病を治療する事を得ん然るに舊來の弊風を脱せざ最も怪しむべき草根木皮を以て病の根を斷んとする庸醫よ委ね其甚しきに

至つてハ我貴重なる愛兒の生命殆んど危険に陥るに臨んで周音を致す者世間擧て數ふべからずハせして特に小兒養育法の大略猶他日を待て子育必携と名くる小兒養育法を説明し聊世の父母愛玉を失ふが如き遺憾なからず小兒養育法一班二件なり然れども小兒に感冒の所なれば防寒の一事ハ暫らくを茲に略述すべし凡そ小兒の病ハ十の七八までハものなり何が故に然りとなれば大人の消化器と自から差異ありす時ハ忽ち病患を惹起す是を母の乳汁の他ハ決して少しの飲生母の乳汁と雖ども小兒の欲すはらぎ其涕泣する毎に晝夜の度ハ忽ち病根となる蓋し小兒の人の米肉を喫すると同一なれば與へなば忽ち消化器に障碍を生ずの變狀を呈し終にハ小兒病中に膜炎世俗に慢驚風或ハ驚風の虫に至る故に生兒一年間ハ一晝夜を過べからず晝に三度夜四度若乳母なり稠煎乳なり牛乳なり與八度を過べからず概して小兒ハめて米肉を與ふるを適度とすとあり況して身體の組織完全なら一の食物を與ふ可らざる細菜ハ必らば消化し易き物を撰善とす總て小兒にハ消化の悪し決して與ふ可らざる殊に香氣強き高熱の物刺戟性ある物ハ縱令滋トて與ふ可らざる

一班

非吉品

田橋本町二丁目三番地

醫 石澤武吉述

疾として自ら其苦痛を訴ふるにても其危篤に至る迄ハ父思ひざるの死をなすこと多むべき事ならざる若し或ハを救ふ事あるも小兒の中度衰弱して成長の後精神必らして樂し

と謂へば故に世の父母たるる前より小兒養育法を心得なきやうに注意して養育す異あることあらば速に良醫ざるやうにすべし蓋し小兒の量を減ざるのみにて決し機も其法術も遂に大人と差出生して凡そ一年間は半ハの体内に在るが如きを以て易く且つ病に罹る時は衰弱とも俄にして回復に至る事く大人の病を治療する醫と甚た拙なき者あり是を以て驗研究に富む良醫士に非ざる小兒病を治療する事を得せど最も怪しむべき草根木する庸醫よ委ね其甚しき

至つてハ我貴重なる愛兒の生命を賣藥等に依頼し其殆んど危険に陥るに臨んで周章狼狽遂に臍を噬の悔を致す者世間擧て數ふべからざる是れ余が憂慮措く能ハざして特に小兒養育法の大略を起草する所以なり猶他日を待て子育必携と名くる小冊子を著し審かに小兒養育法を説明し聊世の父母たる者をして掌中の愛玉を失ふが如き遺憾なからしめんことを欲す

小兒養育法一班

小兒養育中最とも嚴に注意すべき者ハ食物と防寒の二件なり然れども小兒に感冒の怖れべき世俗の略知る所なれば防寒の一事ハ暫らく措き先づ食物の事を茲に略述すべし

凡そ小兒の病ハ十の七八までハ食物より釀成するものなり何故に然りとなれば總て小兒の消化器ハ大人の消化器と自から差異あり故に猥りに飲食を許す時ハ忽ち病患を惹起す是を以て生兒一年間ハ生母の乳汁の他ハ決して少シの飲食も與ふ可らざる且つ生母の乳汁と雖ども小兒の欲すると欲せざるとに拘はらざる其涕泣する毎に晝夜の度なく與ふる時ハ是も忽ち病根となる蓋し小兒の乳汁を哺するハ猶大人の米肉を喫すると同一なれば苟且にも其程度なく與へば忽ち消化器に障碍を生じ或ハ吐乳或ハ青便の變狀を呈し終にハ小兒病中にて最も怖るべき腦膜炎(世俗に慢驚風或ハ驚風の虫と稱する者)を發するに至る故に生兒一年間ハ一晝夜の哺乳必らば七八度を過べからざる晝に三度夜四度若し生母に妨げありて乳母なり稠煎乳なり牛乳なり與ふも是また一晝夜七八度を過べからざる概して小兒ハ齒牙全く發生して始めて米肉を與ふるを適度とすと雖ども幼長自から差あり況して身體の組織完全ならざるが故に大人と同一の食物を與ふ可らざる必らざる細割したる新鮮の肉野菜ハ必らざる消化し易き物を撰みて少量に與ふるを善とす總て小兒にハ消化の悪しき物ハ少量なりとも決して與ふ可らざる殊に香氣強き物脂肪の多き物或ハ高熱の物刺戟性ある物ハ縱令滋養物と雖ども堅く禁トて與ふ可らざる

乳房大にして下垂したる生母及び乳母に在ては乳房内にある乳汁は屢乳酸醱酵を起し乳汁の腐敗に傾く事あり殊に此如き腐敗は夏秋の候に多し若し其腐敗したる乳汁を與ふる時ハ小兒ハ忽ち青便を下し次で吐乳し遂にハ腦膜炎を惹起して不起の不幸を見るに至る左れば生母にても乳母にても夏秋の候にハ毎朝必らば自から乳房を揉で清白なる硝子又ハ無地の陶器皿の上へ乳汁を搾取て腐敗したるや否やを觀察し若し少くしてハ黄色を現はし且つ酸味ある時ハ則ち腐敗したる證據なれば決して小兒に與ふ可らざる時ハ他人の手を假も又ハ自からするも乳房を能く揉で腐敗乳汁を悉く搾り捨て毫も黄色と且つ酸味なく全たく新鮮に復したる後に於て小兒に與ふべし乳汁の乳房中に在て腐敗せしを知らざ小兒に與へて病患を招き早世の嘆を發する者擧て數ふべからざと雖も天下の衆醫局外者も亦た曾て之を知らざ辭柄を天命に任すハ實に鳩嘆の至りなり請ふ世の父母たる者慎んで怠たる事なかれ

世俗に乳離と云ふ事あり其乳離の時節ハ齒を生ト自から食物を變へ得べき様子を顯し種々淡薄なる食品を與へて消化器に害を見ざる時ハ乳離するも敢て障害なし此期は大抵十一月より十四ヶ月の間なれば乳離の豫備として二三週或ハ一ヶ月前より乳汁の他に最も消化し易き粥の稀汁又ハ山慈姑精良の水飴等にて造る人工食物を製し以て胃の消化力をして馴しむべし然れども生來虚弱の小兒ハ少くも滿十二ヶ月の後に於て自ら食物を嚙擢する狀を觀察して徐むるに行なふを佳とす乳離の最も好き時節ハ四月五月或ハ九月十月とす十二月一月二月も敢て悪しあらざれども成丈避べし最も悪しきは六月七月八月の如き盛夏ハ宜しからば總て乳離の時ハ小兒の神經不馴の食に逢が故に感動し易し斯る場合に於てハ其靜止する爲め戸外に出て新鮮の大氣を呼吸せしめながら運動せは之が爲め胃の消化力を強剛ならしめ且つ身體の健康を保持するを以て食物に耐るの力を發生すべし俗間に於て乳離の時に臨み始めて食を哺むの可憐

の狀に愛慾を増し度を顧りみせ往々にしてあり是れ大に小兒の質を養成する者なれば決して徒世の父母ハ兒を愛すること分命を思ふ事分外に薄し何となれ乳房を含ませ其笑ふや忽ち糖餅求めんと欲す朝たに夕べに只た事なきが如し何ぞ其愛の厚きや一あるや其不快の輕重を識別せざる睡眠せん事を希望し第二に苦惱之が全癒を望めり第三に素人目危篤の時及んで醫士を迎ふ其篤を得バ僥倖と雖も既に危篤に及て死ハ九なり九死一生を乳汁賣者なり苟且にも實に兒を愛さん

んとするよりも寧ろ其生命を愛しそ生命を愛して無病成長を恃ん及び顔又ハ舌井に鰓門の動き方十あらば速かに小兒専門の良醫に就を求め其他素人に了解し難き事柄を問は以て生命を保有するの眞愛を若し夫れ之を怠たらば則ち慈悲の父母と云も過言にあらば何含め糖餅を與ふるの一事を以て眞るを得んや余不敏と雖も小兒科經驗と感識に於て頗る得る所な慈父母の爲に蓄積の枝を伸さんと此數紙を贅して普ねく江湖に布くハ足下にあり豈に遠きを求めん世

たる生母及び乳母に在てハ乳房
酸酵を起し乳汁の腐敗に傾く
敗ハ夏秋の候に多し若し其腐敗
時ハ小兒の忽ち青便を下し次で
を惹起して不起の不幸を見るに
も乳母にても夏秋の候にハ毎朝
揉で清白なる硝子又ハ無地の陶
取て腐敗したるや否やを觀察し
を現し且つ酸味ある時ハ則ち
は決して小兒に與ふ可らざる
又ハ自からするも乳房を能く揉
り捨て毫も黄色と且つ酸味なく
る後に於て小兒に與ふべし乳汁
せしを知らざ小兒に與へて病患
する者擧て數ふべからざと雖も
亦九曾て之を知らざ辭柄を天
に至りなり精々世の父母たる者
かれ
のり其乳離の時節ハ齒を生ト自
の様子を顯し種々淡薄なる食品
を見ざる時ハ乳離するも敢て障
ケ月より十四ケ月の間なれば
二週或ハ一ケ月前より乳汁の他
稀汁又ハ山慈姑精良の水飴等
表し以て胃の消化力をして馴し
血弱の小兒ハ少くも満十二ケ
物を嚙擢する状を觀察して徐む
乳離の最も好さ時節ハ四月五月
二月一月二月も敢て悪しあらざ
悪しきハ六月七月八月の如き
乳離の時ハ小兒の神經不馴の
斯る場合に於てハ其靜止す
の大氣を呼吸せしめながら運
化力を強剛ならしめ且つ身體
て食物に耐るの力を發生すべ
に臨み始めて食を哺むの可憐

の狀に愛慾を増し度を顧りみざして徒食せしむる者
往々にしてあり是れ大に小兒の健康を害し虚弱の性
質を養成する者なれば決して徒食満腹せしむべから
せ世の父母ハ兒を愛すること分外に厚くして兒の生
命を思ふ事分外に薄し何となれば小兒の泣や忽ち
乳房を含ませ其笑ふや忽ち糖餅を示し以て其歡を
求めんと欲す朝に夕べに只た無病成長を恃の外他
事なきが如し何ぞ其愛の厚きや而して一旦不快の狀
あるや其不快の輕重を識別せし第一に乳房を含めて
睡眠せん事を希望し第二に苦惱を察して賣藥を以て
之が全癒を望めり第三に素人目にも病狀を窺ひ知る
危篤の時及んで醫士を迎ふ其第三に至りて幸に治
を得バ僥倖と雖も既に危篤に及んでハ生ハ一に
て死ハ九なり九死一生を乳汁賣藥に依頼するが如き
何ぞ其愛の薄きや想ふに世の父母の小兒を愛するハ
眞に愛するに非ざして所謂兒煩惱即ハち愛に溺るハ
者なり苟且にも實に兒を愛さんとせば其形容を愛さ
んとするよりも寧ろ其生命を愛さでハ叶ふ可らざ凡
そ生命を愛して無病成長を恃んにハ小兒の泣く有様
及び顔又ハ舌并に頰門の動き方大小便等の色に異狀
あらば速かに小兒専門の良醫に就て診察を請ひ治術
を求め其他素人に了解し難き事柄ハ遠慮なく小細に
質問し以て生命を保有するの眞愛を盡さざるべから
ざ若し夫れ之を怠たらバ則ち愛兒を見殺にする無
慈悲の父母と云も過言にあらざ何ぞ區々たる乳房を
含め糖餅を與ふるの一事を以て眞正の慈父母と稱す
るを得んや余不敏と雖も小兒科を修むること數年
經驗と感識に於て頗る得る所あり今や世の眞正の
慈父母の爲に蓄積の枝を伸さんと欲す故に第一着に
此數紙を贅して普ねく江湖に布く杏林玄幽なるも實
ハ足下にあり豈に遠きを求めん世の慈父母之を思へ

301693-001-2

特72-151

小兒養育法一班

石沢 武吉/述

M19.7

BEI-0001